

ずいそう

南極で感じたこと

室田 恭宏



南極の昭和基地で越冬して、日本に帰ってきてから1年が経ちました。

南極の大自然の中で1年間生活して、地球と人間とは生きるスピードやスケールが違うという当たり前の事実を実感しました。人類の祖先である原人は約100万年に誕生したと言われていています。地球が今50歳だと仮定すると、人類の歴史は4日に過ぎません。地球にとっての人類はセミの寿命よりも短いということになります。

南極で地球の46億歳という年齢を考えました。南極大陸は日本の37倍の広さです。その上に平均2千メートル以上の高さの氷が乗っています。氷河は一見すると止まって見えますが、1年間に数百メートルの速度で大陸内部から海へ向かって移動しています。氷河の端から上を見上げると、高さ百メートルの氷の滝が自分の方向に動き出して、飲み込まれそうになる感覚に襲われました。

昭和基地から50キロメートル離れた場所に、海面から垂直にそびえる高さ4百メートルの断崖絶壁があります。延長3キロメートル真っ直ぐです。何億年もの時間をかけて氷が岩を削り取ったものです。絶壁の真下から上を見上げると、岩に潰されそうな気持ちになりました。また、昭和基地の裏山の頂上付近に直径3メートルの丸い石が転がっています。迷子石と呼ばれています。人間の手で運ぶことは不可能です。氷河期に氷が運んだものです。

寒さについては、慣れればマイナス20度でも暖かく感じました。昭和基地へ到着した12月は南極の夏で、気温はマイナス5度ぐらいです。日本の温暖な気候に慣れた体では寒く感じました。太陽が昇らない極夜時期の6月に向けて気温が下がっていき、マイナス35度を下回りました。気温が下がっていく度に指先に痛みを感じて、10分以上連続して外に居ることができませんでした。

極夜が終わり、日照時間が日に日に長くなり、気温が上昇に転じます。寒さに慣れたので、マイナス20度が暖かく感じ、驚きました。人間の温度センサーは、絶対的ではなく、相対的なものようです。

南極の温暖化について人に聞かれます。実際に温暖

化している南極半島での現象を、南極全体がそうであるかのようにマスメディアが報道しています。南極半島は南極大陸東部の高緯度に位置し、アルゼンチンに近く、人間活動の影響があると考えられています。一方、南極大陸の西側に位置する昭和基地では、観測記録があるこの50年間で一番の寒さを記録しました。国立極地研究所の先生のレポートによると、南極大陸の西側では温暖化の傾向があるが、東側では寒冷化の傾向があるそうです。

越冬隊36人だけの生活は、年齢も出身母体も肩書きも関係なくなりました。日本に居るのは違う人間関係を持つことができました。電気を作ること、水を作ること、糞尿を処理すること、寒さを防ぐこと、モノを運ぶことなどは生きるために必要でした。日本では電話を一本かけて金を払えば一瞬で解決することも、南極では何日もかかります。時間も体力も気力も必要としますが、何事も自分たちでやるしかありません。南極へ行った当初は、つい日本での便利な生活と対比してしまうことがありました。何でも自分でやってみて、いくつものプロセスを経て今の便利な生活があることが、身にしみて分かりました。



写真は水平線を転がる太陽です。極夜が終り2ヶ月ぶりの太陽光線を浴び、心身にエネルギーが注ぎ込まれるのを感じました。自然に感謝して謙虚に接していこうと思います。